水音なき鳴滝

――蜻蛉日記「鳴滝籠り」の意義――

原田敦子

はじめに

道綱母は天禄二年六月、この年正月から打続く夫兼家の前渡りに耐えかねて、山寺に参籠に出かけ、月末近くまでその寺に滞在している。世に言う「鳴滝籠り」である。

さて思ふに、かくだに思ひ出づるもむつかしく、さきのやうにくやしきこともこそあれ、なほしばし身を去りなむと思ひ立ちて、西山に、例のものする寺あり、そちものしなむ、かの物忌果てぬさきにとて、四日、出で立つ。[1]

この鳴滝籠りは、その叙述・描写の克明さと、道綱母の精神生活に大きな転機をもたらした点において、まさに全編の圧巻と言うべく、二十日をこえる参籠期間中に日記の構想を立て、構造の考案が行われたのではないかとする説[2]など、日記の執筆契機と結びつける見解も多い。しかし、日記中の作者の筆は、仏前での祈願や堂内での思惟には殆ど触れることなく、寺の四囲の自然描写や見舞客との交流にその多くが費されるのであり、前年の六月と七月に敢行された唐崎祓や石山詣に見られる情念の奔騰も、表だって描写されることはない。唐崎祓では、水辺でのタマフリによって、[3]石山詣においては、石山の谷の景に死と再生の疑似体験をすることによって、[4]一時的にせよ、文字通りヨミガエリを得て帰途についた作者であったが、そもそもこの鳴滝籠りにあっては、何を目指してこの地に来たり、何を得てこの地を去ったのであろうか。

以下の小論では、「鳴滝」なる地の有する意味と、この地に滞在中の作者の視覚・聴覚のあり方を通して、「鳴滝籠り」の意義を探ってみたいと思う。

一　「例のものする寺」と鳴滝般若寺

道綱母の詣でた「西山に、例のものする寺」が、鳴滝の地にかつ

て存在した般若寺であろうことは、既に定説となっている。[5] 角田文衛氏も、明治初年に廃絶し、現在では右京区鳴滝・般若寺町という地名にわずかにその俤をとどめるこの寺について、近世地誌類の記述や現在の地勢と、日記の記述から内部徴証的に得られた山寺の位置決定のための条件をつきあわせて、般若寺を例の山寺に擬する想定は容易に肯かれるとしておられる。[6]

般若寺は、三宝寺の東、井出口川（三宝寺川）西岸の五台山泉谷にあり、五台山般若寺ともいった。『山州名跡志』によれば、延喜年中に大江玉淵が檀主となり、観賢僧正を開基に建立された古義真言宗御室派の寺院である。『日本紀略』安和元年二月二十三日条に、太政大臣藤原実頼が村上天皇陵に参詣の途次「被レ参二般若寺一」とあり、同書寛仁元年六月五日条には、円融天皇の皇后藤原遵子が没して、「彼宮御ヨ送一葬於般若寺艮地一」とあって、この葬送は『御堂関白記』にも記されている。[7]

角田氏は、倫寧家と般若寺の緊密な関係は、間接的には彼等が家族ぐるみで密着していた小野宮家を通じて、より直接的には倫寧の義兄弟で般若寺の別当であったとおぼしい大僧都元杲を通じて、形成されたと考えられている。[8] 日本古典文学全集の頭注は、[9] こうした想定に明証はないとして懐疑的であるが、少なくとも作者および倫寧家と般若寺の親しい関係だけは、看過されてはならないだろう。ただしかし、日記の中に般若寺の名が記されることは一度もない。前掲六月の記事では、「西山に、例のものする寺」であったし、他に二例この寺とおぼしき寺が登場する場合も、

○日ごろなやましうて、咳などいたうせらるるを、もののけにやあらむ、加持もこころみむ、せばどころのわりなく暑きころなるを、例もものする山寺へ登る。　（上巻　応和二年七月）

○十余日のほどに、例のものする山寺に、「紅葉も見がてら」と、これかれいざなはるればものす。今日しも時雨降りみ降らずみ、ひねもすに、この山いみじうおもしろきほどなり。

（下巻　天禄三年十月）

と、寺名が記されることはなく、鳴滝籠りの例と合わせて実に三度にわたって、「例の（も）ものする（山）寺」が繰り返されるのである。

鳴滝籠りの往路の道中記は、

山路なでふことなけれど、あはれに、いにしへもろともにのみ、時々はものせしものを、また病むことありしに、三四日もこのごろのほどぞかし、宮仕へも絶え、こもりてもろともにありしは、など思ふに、はるかなる道すがら涙もこぼれゆく。供人三人ばかりそひていく。

と記されるが、道綱母の意識は、時々兼家と共に詣でた往時の記憶をたぐり寄せるのみで、その筆致からは、聖地に参入する際の精神の高揚やおののき、さらには、自然との交感によって得られた深々

とした感動を読みとることはできない。ここで彼女がこぼす涙は、自分が病気の時には三、四日も兼家が一緒に籠ってくれたこともあった「いにしへ」と、供人三人ばかりをつれて淋しく山路をたどる現在との、余りにも大きな落差に対してなのであり、平素都での生活では目にすることのできない自然の中に心身を解き放って全身的に共鳴し、滂沱の涙を流す唐崎祓や、「河原には死人も臥せりと見聞けど、恐しくもあらず」という極度の緊張感の中で涙しながら、なおも人目を意識しなければならなかった石山詣の場合とは、遙かな隔たりがある。

関の山路あはれあはれとおぼえて、行先を見やりたれば、ゆくへも知らず見えわたりて、鳥の二つ三つゐたると見ゆるものを、しひて思へば、釣舟なるべし。そこにてぞ、え涙はとどめずなりぬる。

（天禄元年六月　唐崎祓）

有明の月はいと明けれど、会ふ人もなし。河原には死人も臥せりと見聞けど、恐しくもあらず。粟田山といふほどにゆきさりて、いと苦しきを、うち休めば、ともかくも思ひわかれず、ただ涙ぞこぼるる。人や来ると涙はつれなしづくりて、ただ走りてゆきもてゆく。

（天禄元年七月　石山詣）

聖地に赴く心のおののきと自然との共振作用は、初度の初瀬詣の際にも指摘することができた。

それより立ちて、いきもていけば、なでふことなき道も山深きここちすれば、いとあはれに水の声す。例の杉も空さして立ちわたり、木の葉はいろいろに見えたり。水は石がちなる中よりわきかへりゆく。夕日のさしたるさまなどを見るに、涙もとどまらず。

（上巻　安和元年九月）

これらの物詣紀行の最初には、「かくて年ごろ願あるを、いかで初瀬に」「いかで涼しきかたもやあると心ものべがてら浜づらのかたに祓へもせむと思ひて、唐崎へ」「石山に十日ばかり」と、その目的地たる聖地の地名が明記されていた。これに比して鳴滝籠りの場合は、前述の如く寺名が記されることもなく、「鳴滝」なる地名すらも、参籠も終りに近く、道綱母を見舞って帰った「なま親族だつ人」の文の中に初めて見えるのである。

「……。あが君、深くもの思し乱るべかめるかな。

世の中は思ひのほかになるたきの深き山路をたれ知らせけむ」

など、すべてさし向かひたらむやうに、こまやかに書きたり。

鳴滝といふぞ、この前より行く水なりける。

親族の歌に「なるたき」が詠まれなかったならば、作者はついぞ「鳴滝」なる地名を筆にすることもなかったのではないか。この山寺参籠は「鳴滝籠り」として余りにも有名であるが、道綱母の意識の中で「鳴滝籠り」と、とらえられることはなかったかに見受けられる。

二　景勝地、水の聖地としての鳴滝

道綱母がこもった般若寺は、井出口川（三宝寺川）の西岸、白砂山と汎称される標高二六四・五メートルの山の中腹に東向きに立地し、鳴滝川が寺の南を東南方へ流れて、寺の東方を南流する井出口川を合していた。下流は御室川とも称される鳴滝川は、その源を梅ヶ畑の山中に発し、右京区鳴滝を流れて双ヶ岡の南で天神川と合流し、南区吉祥院で桂川にそそぐ急流で、しばしば氾濫した。鳴滝川の名の由来は、「水音の高い急流」の意であろうという。[10]

『山州名跡志』が「一名称ニ西河ト　拾芥抄ニ西河鳴滝也云云」と記し、『蒐芸泥赴』第六に、

仁和寺の西に有梅が畑など云あたりよりながるゝ川の末に岩くみ面白くおちたぎる処有し一とせの大水にながれうせぬ七瀬の霊所の一所にて西の滝といふは鳴滝也

とする如く、鳴滝川を西河、鳴滝の滝の落ちる所を西滝と称し、西滝はまた霊所七瀬の修祓地の一つでもあった。

平安朝の鳴滝般若寺のあたりは、背後の山と鳴滝川によって形作られた山水の美と、『今昔物語集』一九―二三に「堂ノ未申ノ方ニ卯酉ニ大キナル房ヲ立タリ。節モ無キ材木ヲ以テ、微妙ク造タリ。西北ニ廊共ヲ造リ出シテ、本ヨリ面白キ所ヲ弥ヨ此ク微妙キ屋共ヲ造タレバ、」[11]と記される、堂々たる寺の結構が賞美される景勝地であった。鳴滝や般若寺を詠んだ詩歌が、いくつか残されている。

冬日往ニ詣般若寺一、見ニ故蔵閣梨旧房一。中心之感触レ緒難レ禁。遂書ニ所懐一寄ニ覚上人一。　左金吾

僧籠去後幾光陰
赴到那堪泉下心
林学ニ釈尊双樹色一
水伝ニ橋梵一言音一　（後略）　（本朝麗藻　巻下　懐旧部）

秋日遊ニ般若寺一同賦ニ秋山似ニ画図一。
秋山自似画図成。軒騎登臨幾喜レ晴。霧画覩青非ニ筆力一。雲生後素豈人情。翠屏只任嵩煙色。錦障更添峡水声。（後略）
（江吏部集　上）

十一月
鳴滝の落ちくる声の音なきは氷のくさびさしてけるかも
（大弐高遠集・三六八）

白川なる滝のもとにて
落ちまさるわが涙にしくらぶればかの鳴滝も名のみなりけり
（思女集・一七）

これらの詩歌には、多く「峡水声」や滝の水音が詠まれている。

前掲の『蒐芸泥赴』が「七瀬の霊所の一所」とする如く、鳴滝は七瀬祓が行われる水の聖地であった。記録によれば、朱雀上皇や藤原道長の修祓のことが知られる。

太上皇幸二西河一。修二御禊一。便幸二栽松院一。嵯峨野。

（日本紀略　天暦元年三月二十日）

十六日、…出鴨河解除、初自今日七箇所解除也、…
十九日、…到鳴滝解除、…
廿日、…出耳聡河解除、…
廿三日、…松前為解除行間、於川原雷電数度、…
廿四日、…到大井解除、…
廿五日、…出東河解除、…
廿六日、到般若寺滝解除、…

（御堂関白記　寛弘八年二月）

一般に霊所七瀬は、『御堂関白記』に出る鳴滝・耳聡川・松前（崎）・大井河に河合・東滝・石影を合わせて言うが、道長の「七箇所解除」は必ずしも霊所七瀬を指すものではなかったらしい。いずれにしろ、「七箇所解除」の初めに鴨河（十六日）と鳴滝（十九日）、終わりに東河（廿五日）と般若寺滝（廿六日）で行われているところに、東西相対する鴨河（東河）と鳴滝（般若寺滝）の修祓地としての重要性が浮かび上がってくると言えよう。

鳴滝川の流れ入る桂川は、鴨川の東河に対して西河と称されることもあり、[12] 都の人々にとって最重要の川であったが、鳴滝川が源を発する右京区梅ヶ畑の丘陵からは、最近平安時代の雨乞儀式の跡が発掘されている。[13]『扶桑略記』延喜二年六月十七日条には、

召二陰陽寮一。自二今明日一。於二乾方一。可レ勤二五龍祭一之由仰下了。

其地鳴滝北十二月谷口。

とあり、鳴滝もまた雨乞の地であった。してみると、鳴滝川の流域には明らかに水の信仰があり、鳴滝川は、まさに修祓を行うにふさわしい聖なる川であったとすることができよう。このような水の信仰は、単に土俗的、神道的、もしくは陰陽道的なものにとどまらず、仏教信仰とも融合していたようである。

般若寺の開基観賢僧正は、仁和寺別当に任じたこともあり、晩年は仁和寺の別院般若寺に常住したらしい。[14]『今昔物語集』一五―五四は、この仁和寺の僧観峰威儀師の従童が鳴滝川で水浴した後、西に向いて念仏を唱え、極楽往生した話を伝える。従童の名は滝丸といった。

此ノ童仁和寺ノ西ニ鳴滝ト云フ所ニ行テ、河ニ水ヲ浴テ、小松原ノ有ル所ニ行テ、薄ヲ刈集テ小キ蘆ヲ造テ、蘆ノ内ニ入リ居テ、西ニ向テ掌ヲ合セテ、音ヲ挙テ、「南無阿弥陀仏」ト十二十度許唱フルニ、其ノ辺ノ馬・牛飼フ童部此ノ音ヲ聞テ、「滝丸ハ何事為ルゾ」ト思テ、寄テ立チ並テ見ルニ、如此ク念仏ヲ唱ヘテ、念仏ノ音止ヌレバ、頸ヲ打垂ヒテ死ヌ。其ノ合セタル手ハ然乍ラ有リ。（中略）

此レヲ思フニ、賤ノ物ノ故モ不知ヌ童也ト云ヘドモ、年来極楽ヲ願ケルヤ。口ヲ動カシケルハ念仏ヲ申シケルナメリ。遂ニ

命終ラムト為ル時ヲ知テ、静ナル所ニ行キ居テ、居乍ラ掌ヲ合セ念仏ヲ唱ヘテ、西ニ向テ死ヌレバ、疑ヒ無ク極楽ニ往生シタル者トゾ語リ伝ヘタルトヤ。

鳴滝は仁和寺からすると、西の方向に当る。従童の滝丸なる名も、この童が滝の精であるかのような印象を与えるが、右の話は、鳴滝の水の霊力の信仰が、仏教の側にも存したことを物語る。というよりも、そもそもは般若寺の創建そのものが、鳴滝の水の信仰に立脚するものではなかったろうか。

道綱母は石山参籠中に、寺の別当とおぼしき僧によって銚子の水を膝に注ぎかけられる夢を見ているし、鳴滝参籠前の長精進の期間中にも、腹中の蛇が動きまわって肝を食む、これを治すには顔に水を注げばよい、という夢を見ている。これらの夢を彼女の性の願望や苦悩を端的にあらわしたものとすることもできようが、[15] いずれの夢も聖なる空間や時間の中で見られたものである以上、その根底には癒しの水や再生の水への切実な希求が秘められていたと考えざるを得ない。水辺唐崎への祓行は言うに及ばず、初度の初瀬詣や石山詣の旅でも道綱母は行く先々で水に出会い、心と身体を蘇らせている。[16] 聖地初瀬に初めて入らんとする時の初瀬川の川音は、別して印象鮮烈であったと見え、「いとあはれに水の声す」「水は石がちなる中よりわきかへりゆく」と、記されていた。

鳴滝に入るには、鳴滝川を渡らねばならなかった。詣で着いた寺の御堂にも、世評に高い鳴滝の滝音は必ずや響いていたことであろう。しかし、道綱母の目と耳は、何故か鳴滝川の流れと滝音をとらえようとはしなかった。景勝の地であり、水の聖地でもある鳴滝に参入しながら、意識的にか無意識的にか、水をとらえようとしなかった道綱母の視覚と聴覚のあり方が問題となろう。

三　鳴滝籠りの視覚と聴覚

鳴滝籠りの自然描写については、既に宮田京子氏に貴重な御指摘がある。すなわち、視覚描写の面では、近景描写に遠景描写、昼間の花の描写に闇の中の螢の描写というように、これまで徐々に獲得されてきた方法がいずれかに偏ることなく、自在にその描写の手段となり得ており、聴覚描写の面でも、単一の音ではなく集合的な音を聞き入れていて、聴覚が視覚から解放され、独立して描写の手段になり得ているとするものである。[17] こうした方法は、初度初瀬詣・唐崎祓・石山詣の紀行を記すことを通して、作者自身が磨き上げてきた自然観照の姿勢や表現力の結実したものであったとされるが、また一面、鳴滝般若寺の地理的条件や作者の置かれた状況を反映した、鳴滝籠り独自の方法があったことも忘れてはなるまい。

Aまづ僧坊におりゐて、見出だしたれば、前に蘚ゆひわたして、また、なにとも知らぬ草どもしげき中に、牡丹草どもいと情なげにて、花散りはてて立てるを見るにも、「花も一時」といふ

ことを、かへしおぼえつつ、いと悲し。

B暑ければ、しばし戸をおし開けて見渡せば、堂いと高くて立てり。山めぐりて懐のやうなるに、木立いとしげくおもしろけれど、闇のほどなれば、ただいま暗がりてぞある。初夜行なふとて、法師ばらそそけば、戸おし開けて念誦するほどに、時は山寺わざの、貝四つ吹くほどになりにたり。

C曙を見れば、霧か雲かと見ゆるもの立ちわたりて、あはれに心すごし。

Dめぐりて山なれば、昼も人や見むのうたがひなし。簾巻き上げてなどあるに、この時過ぎたる鶯の、鳴き鳴きて、木の立ち枯れに、「ひとくひとく」とのみ、いちはやくいふにぞ、簾おろしつべくおぼゆる。そもうつし心もなきなるべし。

E木陰いとあはれなり。山陰の暗がりたるところを見れば、螢は驚くまで照らすめり。里にて、昔物思ひうすかりし時、「二声と聞くとはなしに」と腹立たしかりしほととぎすも、うちとけて鳴く。くひなはそこと思ふまでたたく。いといみじげさまさる物思ひの住みかなり。

Fかくてあるは、いと心やすかりけるを、ただ涙もろなるこそ、いと苦しかりけれ。夕暮の入相の声、茅蜩の音、めぐりの小寺のちひさき鐘ども、われもわれもとうちたたき鳴らし、前なる岡に神の社もあれば、法師ばら読経奉りなどする声を聞くにぞ、いとせむかたなくものはおぼゆる。

「堂いと高くて立てり」(B)は、堂が高く聳えているのではなく、山の高いところに立っている意だとされる。[18] 石山寺の「堂は高くて、下は谷と見えたり」の例が思い合わされるが、石山詣の際の作者の視線が堂下の谷や麓の泉に導かれたり、遠く瀬田川の向う岸にまで放たれたのとは異なり、ここでの作者の視線は、四囲の山や木立によって遮られて、内に籠るものとなっていた。

。山めぐりて懐のやうなるに、木立いとしげくおもしろけれど、闇のほどなれば、ただいま暗がりてぞある。(B)

。めぐりて山なれば、昼も人や見むのうたがひなし。(D)

。木陰いとあはれなり。山陰の暗がりたるところを見れば、螢は驚くまで照らすめり。(E)

「山めぐりて懐のやうなる」地勢は、いわゆる「こもりく」型の地形で、母胎回帰の安らぎを感じさせるものであったが、大きな洞窟にも擬せられるこうした地形の中では、物理的にも感覚的にも自他の視線が遮断される。二度にわたる初瀬詣の道中は、まさしく「見ること」を求める旅であった[19]と言えようが、詣で着いた「こもりく」初瀬の御堂では、外景を「見ること」が放棄されていた。[20] 長期にわたる鳴滝参籠では、さすがに「見ること」は完全に放棄されることはなかったものの、「昼も人や見むのうたがひな」き安逸の中で、「見る」「見られる」の厳しい緊張関係は失われている。かわっ

て彼女が見るのは、闇の中の木立や、木陰、山陰の暗がりとそこを照らす螢、さらには曙に立ち渡る雲霧など、すべて暗く閉ざされた視界の中で限定的にとらえられたものであって、白昼の明るい光の下で見たものは、わずかにみじめな我身に思いよそえられる、散り果てた牡丹の花だけであった。かつて「河原には死人も臥せりと見聞けど、恐しくもあらず」と言いきり、

山科にて明けはなるるにぞ、いと顕証なるここちすれば、あれか人かにおぼゆる。人はみなおくらかし先立てなどして、かすかにて歩みゆけば、会ふ者見る人あやしげに思ひて、ささめき騒ぐぞ、いとわびしき。

と、他人の目に我身をさらしながらも石山詣に向かい、大きな自然の中で鬱屈した心身を解き放った時の高揚した精神にとってかわって、ここで支配的なのは、「こもりく」に身をひそめ、木立や闇をすかして恣意的、限定的に物を見る、ある種衰弱した精神なのである。同様のことは、聴覚についても言いうるであろう。

山寺に参籠中の彼女の耳に僧の読経の声や鐘の音、法螺貝の音が聞こえてくるのは、当然のこととして、その他の聴覚描写も、対象に限って言えば、この季節のものとしては歌にもしばしば詠まれるほととぎす・水鶏・茅蜩の声にとどまるのであり、季節はずれの鶯の声を「ひとくひとく」と聞くところに、わずかに作者の心情の吐露を見出すことができる。しかし、時季遅れの夏の鶯の声に己が心情を托していく方法は、既に前年の天禄元年六月の独詠歌、

鶯も期もなきものや思ふらむみなつきはてぬ音をぞなくなる

によって十全の高みに達していた。これに比べれば、鶯の鳴声を「ひとくひとく」と聞くのなどは、道綱母の切実な思いの反映であったとしても、少々通俗のそしりを免れまい。前掲宮田氏の御指摘の如く、聴覚描写の表現手法に深化が見られることは否定できないが、鳴滝籠りの環境が新しい対象を発見させたとは言えないのである。

鳴滝籠りの聴覚描写や視覚描写に貪欲さが欠けるのは、京にも近く、既に何度も訪れて新鮮さを失った寺での生活に京の日常が容赦なく入り込んでくるからではある。しかし、それ以上に、道綱母の意識の深層に、非日常と日常、聖と俗の狭間にあって、非日常の側に惹かれゆこうとする自身に、危うく制動をかけるものがあったと考えられないであろうか。

四　境界としての鳴滝

鳴滝籠りの決行は、道綱母にとって、「兼家に執着する自己を振り切る」行為であり、「夫兼家へのひたぶるの反逆や、意固地な自己の貫徹であるのみにとどまらず、あえて兼家から離れ、その愛憎から脱却して、はじめて彼女が主体的な自己を見出す方途をも孕んだ行為」であったとされる。[21] そのことに異論はない。では、そうした重大な行為を決行する場所が、なぜ鳴滝殿若寺なのか。さらに、

再度問えば、数ある詣で先の中から選びとられたはずのこの地が、作者の口からは鳴滝とも般若寺とも語られないのは、一体なぜなのであろうか。

般若寺は、かつて道綱母が夫と共に時々籠ったこともある寺で、倫寧家とも何がしの関係があったと思われるので、長期滞在にはうってつけの寺であった、もし彼女が出家を望んだとしても、夫や父親から手がまわって、簡単には実現に至らないであろうことも折り込みずみだったと考えられる。反面、成り行きで出家に追い込まれたとしても、兼家の妻としての体面を保つことができる寺でもあった。また、この寺は、兼家の本邸との間を半日で往復できる距離にあった。京中からの親族や見舞客の来訪で、籠りの場が日常性に侵されていった所以でもある。しかし、鳴滝選定の理由が、そうした俗的・日常的な要因ばかりであったとは考えがたい。既に何度も参詣や参籠を経験して、聖地の霊性に対する畏怖や戦慄の感覚は薄れていたとは言え、道綱母の身体感覚の奥にうずく聖なる水への渇仰や、「こもりく」参入の願望が、彼女を鳴滝へとかりたてたことは否めまい。初度の初瀬詣や唐崎祓、石山参籠の体験の中で、それらは一時的にもせよ、道綱母の懊悩を和らげ、心身を蘇生させたからである。

一般的な認識からすれば、鳴滝は郊外にあったが、また一面、洛中と洛外、現世と他界の境界というイメージも持ち合わせていたと考えられる。足利健亮氏は、東の鴨川に対する西の嶋田川が御室川の九世紀の呼称であり、鴨・嶋田の京郊二河川の河原は、平安初期にあっては殆ど無制限に京戸の葬送地として利用されていたと考えられると述べられている。[22] 足利氏はさらに、平安京をめぐる四神の思想において、青龍の鴨川に対する白虎をこの嶋田川（御室川）であると規定され、東京極と鴨川、西京極と嶋田川の間の地帯を、氏のことばで言う平安京をとりまく「帯状空間」―「京域外周の帯状空間」の東・西のものと考えられた。そこは都市としての平安京の「郊外」、「アーバンフリンジ」であって、工房や救済施設の拡延を受けとめる予備空間および葬送のための空間であり、水害の直接的な影響を少しでも小さくするための緩衝空間としての性格も有した。[23] 御室川（鳴滝川）は、般若寺の南を東南に向かって流れ、木島神社（蚕の社）の社域西辺に達して、京域を限りつつ南流する川となる。従って、鳴滝般若寺付近は、足利氏の言われる帯状空間の西北隅のさらに西北にあたり、平安京域からは完全な郊外になる。ただ、御室川（鳴滝川）の有する境界の川としての性格は、上流のこのあたりでもある程度意識されていたのではなかろうか。

鳴滝川の流れる宇多野（福王子・鳴滝・花園を含む）は、『日本後紀』大同元年三月十九日条に、

以二山城国葛野郡宇太野一為二山陵地一。

とする如く、山陵の地であった。光孝（仁和三年没）・村上（康保

四年没）・円融（正暦二年没）の三天皇の陵墓が、それぞれ宇多野馬場町・鳴滝宇多野谷・宇多野福王子町に営まれているし、光孝天皇皇后班子（昌泰三年没）の陵墓もこの付近にあったとされる。[24] もっとも円融天皇の崩御は『蜻蛉日記』より後のことであるから、ここでは論の外におくとして、仁和寺の北にして般若寺の東北、大内山山頂の東には、承平元年に仁和寺で死去した宇多天皇の大内山陵も存在した。光孝天皇陵は、後田邑陵もしくは小松山陵とも称され、『帝王編年記』仁和三年条に、

九月二日壬申。奉レ葬二于小松山陵一。葛野郡仁和寺。号二光孝天皇又小松帝一。

とあり、『雍州府志』に、

在同寺（筆者注仁和寺）西田間、今太秦東北有称小松之処、恐奉葬斯地

と、小松の地名を指定するによって、仁和寺の南西にある南面した円墳がそれかと治定されている。[25] 鳴滝籠りの終り近く、道綱を兼家邸に出だし立てた後の記事に、

……、例の、時しもあれ、雨いたく降り、神いといたく鳴るを、胸塞がりて嘆く。すこし静まりて、暗くなるほどにぞ帰りたる。「もののいと恐しかりつる陵のわたり」などいふにぞ、いとぞいみじき。

とある陵は、この光孝天皇陵のことと考えてよいであろう。光孝天皇皇后班子女王の陵墓については、『日本紀略』に、

奉レ葬二先大后於葛野郡頭陀寺辺一。（昌泰三年四月四日条）

と見える。頭陀寺跡は鳴滝の辺りとされ、班子を祭神とする福王子神社がその陵墓にあたるとも言われるが、所在は不明という。[26] 『日本紀略』康保四年六月四日条に、

奉レ土二葬先皇於山城国葛野郡田邑郷北中尾一。

とする村上天皇陵は、村上山山頂にあって、般若寺の東方に位置した。兼家の伯父太政大臣藤原実頼が、安和元年村上天皇陵参拝の途次、般若寺に参詣したことは、既に記した通りであるが、兼家の異母妹登子が村上天皇に召されて入内していたので、村上天皇崩御とその山陵のことは、道綱母にとっても無関心事ではなかった。

御陵やなにやと聞くに、時めきたまへる人々いかにと、思ひやりきこゆるに、あはれなり。やうやう日ごろになりて、貞観殿の御方に、いかになどきこえけるついでに、

世の中をはかなきものとみささぎのうもるる山になげくらむやぞ

御かへりごと、いと悲しげにて、

おくれじとうきみささぎに思ひいる心は死出の山にやあるらむ

鳴滝と平安京の間には、こうした山陵地帯が横たわっていた。道綱や貞観殿登子ならずとも、これらの陵を「いと恐し」と感じ、よ

し観念的にもせよ、死出の山に重ねて見ることは、至極自然のことであったと思われる。そうした点で鳴滝や宇多野は、他界との境界とも観ぜられたのではなかろうか。

五　他界からの影

道綱母の中には、明らかに他界の方に惹かれゆくものがあった。そうした情感を象徴的に表現しているのが、「心すごし」なる語である。この語は日記中に四例見えるが、そのうち三例が鳴滝籠りの記事に集中している。

①曙を見れば、霧か雲かと見ゆるもの立ちわたりて、あはれに心すごし。

②日ごろものしつる人、今日ぞ帰りぬる。車の出づるを見やりて、つくづくと立てれば、木陰にやうやういくも、いと心すごし。見やりてながめ立てりつるほどに、気や上りぬらむ、ここちいと悪しうおぼえて、わざといと苦しければ、山ごもりしたる禅師呼びて護身せさす。

③夕暮になるほどに念誦声に加持したるを、あないみじと聞きつつ思へば、昔、わが身にあらむこととは夢に思はで、あはれに心すごきこととて、はた、高やかに、絵にもかき、ここちのあまりに言ひにも言ひて、……

④……、やをら、端のかたに立ち出でて見出だしたれば、月いとをかしかりけり。東ざまにうち見やりたれば、山霞みわたりて、いとほのかに、心すごし。

④の例は天延二年一月広幡中川の家での記事であるが、①～③はすべて鳴滝籠りの中のことである。④の前後には、前年八月に広幡中川の家に移ってきてからは、兼家の訪れが絶え果てたこと、今や夫との絶縁を動かぬものとして深刻に受けとめ、我身の孤独感をひそかにかみしめずにはいられないことなどが、記される。①は、鳴滝入山後、迎えに応じない作者に業を煮やして兼家が帰ってしまった翌朝、兼家への手紙をしたためて道綱に托した際の自然観照、②は、先日から見舞いに来ていた叔母が帰ってゆくのを見送った際の感懐である。注目すべきは、これらの情感が、おそらくは建物の端近くから、薄光の中で視覚にとらえられた景によって催されたであろうと考えられることである。④には「端のかたに立ち出でて見出だしたれば」とあって、作者が端近くいることが明示されるが、①の「曙を見れば」、②の「車の出づるを見やりて、つくづく立てれば」との表現からも、同様のことが想像される。①と②は、京へ行く人を見送って立ち尽していたのであろう。

建物の「端」は、内外両領域のそれぞれに接点を持つ境界領域であり、「変化の人」の場であるとともに、「眺め」の場でもあった。異界との交信を可能にし、中空の宙づり状態を甘受せざるをえない物思う人を手繰り寄せるのも、この「端」の境界性だと言うことが

できよう。[27] 石坂妙子氏が引かれる、かぐや姫の端に「いでゐて」の物思いや、『更級日記』の作者とその姉の「端」体験は、王朝の「端」空間が、日常的感性の域を超えて異界・他界への回路であったことを如実に示している。鳴滝籠りの中の作者にも、同様の「端」体験があったらしい。

その十三日の夜、月いみじく限なくあかきに、みな人もねたる夜中ばかりに、縁に出でゐて、姉なる人、空をつくづくとながめて、「ただ今ゆくへなく飛びうせなばいかが思ふべき」と問ふに、なまおそろしと思へるけしきを見て、ことごとにいひなして笑ひなどして聞けば、……　（更級日記）

かく不浄なるほどは夜昼のいとまもあれば、端のかたに出でゐてながむるを、この幼き人、「入りね入りね」といふ気色を見れば、ものを深く思ひ入れさせじとなるべし。

（蜻蛉日記・天禄二年六月）

石坂氏も指摘される如く、『更級日記』の場合は、死の影を漂わせる姉のことばと、「空をつくづくとながめ」る物に魅入られたかのような尋常ではない姉の姿に、妹が切迫した雰囲気に引き込まれ、現実感覚を喪失しそうになった恐怖から、「なまおそろし」と思ったのであるし、『蜻蛉日記』の場合は、「端」という異空間で内なる人々とは異なった心境にある母を、息子の道綱が自分の側に呼び戻そうとしているのである。傍らの人に「なまおそろし」なる感覚を抱かせ、自分の側に呼び戻させずにはおかない、「端」にいる人の異感覚は、「端」の人自身には「心すごし」ととらえられたのではなかろうか。現実には行き所のない中空の状態で、異界や他界にひかれゆくものを感じてぞっとするのが、「心すごし」の感覚だったと思われる。高橋文二氏も『源氏物語』の「心すごし」について、「ゆゆし」や「おそろし」と共通する、この世とこの世の外の世界との境界線で使われる、二つの世界の緊張関係を微妙に反映する言葉ではないかとして、「すごし」の語義に共通する「ぞっとするほど」という感じ方に、他界の影の表れを見ておられる。[28]

道綱母の中にはもともと「みみらくの島」[29]や「さくな谷」[30]など、他界へ惹かれゆく資質があった。空間的に他界との境界を思わせるものを有した鳴滝の山寺において、京での生活や兼家との関係に強い未練を持ちつつも、出家や死の誘惑から逃れがたかった作者の心理に、他界の影がさしたのが、「心すごし」の語であったとすることができよう。②の例で、気分が悪くなって山ごもりの禅師に護身をさせているのも、こうした「心すごし」の感覚と身の内なる現実的な生の感覚の相克に、彼女自身の肉体が耐えきれなくなったことをあらわしている。

③の例で「昔、わが身にあらむこととは夢にも思はで」とあるところ、日本古典文学全集頭注[31]は、「あはれに心すごきこと」に注して、「寂寞感に包まれて感傷的な気分になること。すさまじい、恐

ろしい、などの感じではなく、女が山寺にこもって僧の祈禱を受けたり、また自分でも念誦している様子を、人から話に聞いたり、物語で読んだりした時の浪漫的な感動をいう」と注する。しかし、ここは、ただ浪漫的な感動というよりは、若い娘の鋭い感性が、こうした物淋しい所為に他界からさす影を無意識裡に感じとっていたことを示すのではなかろうか。山寺へ参詣することは、聖地という異界に参入することであるとともに、山中での死と再生の疑似体験をすることでもあったのである。(3)

六　大門の内なる「眺め」

聖地たる般若寺の内と外を隔てるのは、寺の大門であった。前述の如く、般若寺は東向きに建てられていたから、この大門も京のある東に向いていて、本来は聖なるべき寺の生活と、俗なる京の日常の生活を隔てるものであったと考えられる。

A大門のかたに、「おはしますおはします」といひつつ、ののしる音すれば、あげたる簾どもうちおろして見やれば、木間より火二ともし三ともし見えたり。幼き人けいめいして出でたれば、車ながら立ちてある、「御迎へになむまゐり来つるを、今日までこの穢らひあれば、え降りぬを、いづくにか車は寄すべき」といふに、いとものぐるほしきここちす。

B……、ある日の昼つかた、大門のかたに、馬のいななく声して、人のあまたあるけはひしたり。木の間より見通しやりたれば、ここかしこ、直人あまた見えて、歩み来めり。兵衛佐なめりと思へば、（中略）木陰に立ちやすらふさま、京おぼえていとをかしかめり。

C大門引き出づれば、乗り加はりて、道すがら、うちも笑ひぬべきことどもを、ふさにあれど、夢路かものぞ言はれぬ。

Aは兼家、Bは兼家の長男道隆の来訪の場面であり、Cは道綱母が兼家によって強引に下山させられる場面である。京からは何人もの人間が作者に下山をすすめにやって来たが、中で重要人物である兼家と道隆にかかわって、大門に言及されるのが注目される。道綱母の聴覚は、まず大門のかたの物音をとらえて、京からの人の来訪を察知し、ついでその視覚が木の間から透かし見た人影によって、来訪者を確認する。鳴滝入山後間もなく訪れた兼家は、「いとものぐるほしきここちす」ととらえられ、時日が経過して来訪した道隆の姿は、「京おぼえていとをかしかめり」ととらえられるが、こうしたとらえ方は、人物の好悪を超えて、道綱母と京との心理的距離をあらわすものでもあろう。彼女は、「大門のかた」から来る人に、まぎれもなく京の日常生活を見ていた。大門のかたに注がれる聴覚と視覚は、京の日常生活への未練と回帰の志向をあらわすものに他ならない。兼家に強引に下山させられる際の叙述に、「大門引き出づれば」と、ことさら「大門」への言及がなされる所以でもある。

道綱母がこもった鳴滝般若寺は、「大門」に象徴される、日常生活との境界や、鳴滝川や山陵によって象徴される平安京や他界との境界など、いくつかの重層する境界によって区切られた空間であった。さらには第二節で述べた如く、七瀬祓の修される禊祓の地であり、それ以前に水の聖地でもあったと言うことができる。ただ、道綱母の意識には、時として他界の影がさすことはあっても、他界との境界や水の聖地としての観念は、意識下に押さえ込まれることが多かった。般若寺の寺名が一度も記されることなく、「例の(も)ものする(山)寺」に終始すること、鳴滝の地名が、参籠も終りに近くになって、道綱母を見舞って帰って行った「なま親族だつ人」の文の中に初めて見えることについては、先に述べた通りであるし、何にもまして、道綱母の聴覚は鳴滝の水音をとらえていないのである。

しかし、これらのことは、鳴滝籠りの最初から予想されたことであったとも言えよう。兼家の前渡りの苦しみに耐えきれず、意を決して出てきた旅ではあったが、彼女には、「兼家への断てぬ執着」から、「これを決定的な行動とせず今後の進退をいかようにも選びうる自由を保留したい思い」[33]があった。兼家への愛憎にのたうち、兼家との葛藤に疲労困憊していたはずの彼女が、夫と何度も詣でた寺を参籠先に選んだのも、女心の未練ではある。自身の置かれた状況が、唐崎祓や石山詣の時に増して危機的であればあるだけ、道綱母は自身を遠くへ、より広い世界へ解き放つ勇気を持てなかったのではあるまいか。かねてよりゆかりの山寺の大門の内なる「こもりく」の空間で、母胎回帰の安逸に身を委ね、意識下で半ば閉ざした視覚・聴覚でとらえられるものが、道綱母の鬱屈を散じるに至らなかったのは、当然と言えば当然であった。初度の初瀬詣や、唐崎祓・石山詣には見られなかった「ながめ」の姿勢が顕著となるのも、[34]また自然であったと言えよう。

①人やりならぬわざなれば、とひとぶらはぬ人ありとも、夢につらくなど思ふべきならねば、いと心やすくてあるを、ただ、かかる住まひをさへせむとかまへたりける身の宿世ばかりをながむるにそひて、

②かく不浄なるほどは夜昼のいとまもあれば、端のかたに出でてながむるを、この幼き人、「入りね入りね」といふ気色を見れば、ものを深く思ひ入れさせじとなるべし。

③日ごろものしつる人、今日ぞ帰りぬる。車の出づるを見やりて、つくづくと立てれば、木陰にやうやういくも、いと心すごし。見やりてながめ立てりつるほどに、気や上りぬらむ、ここちいと悪しうおぼえて、わざといと苦しければ、山ごもりしたる禅師呼びて護身せさす。

④(わがもとのはらから一人、また人もろともにものしたり。)……、いと心細げにいひても、かすかなるさまにて帰る。ここちけしうはあらねば、例の見送りてながめ出だしたるほどに、

⑤……、今朝、京へ出だし立てて、思ひながむるほどに、空暗がり、松風音高くて、神ごをごをと鳴る。

⑥「かくてのみとしも思ひたまへねど、ながむるほどになむ、はかなくて過ぎつつ、日数ぞつもりにける。……」

⑦またの日、返りごとあり。……とあるを、いとあはれに悲しくながむるほどに、

⑧かくしつつ日ごろになり、ながめまさるに、……

一般に王朝女性の放心したような物思いのポーズをあらわす「眺め」は、「待つ」ことが日常化された王朝女性のポーズをあらわすのに、もっともふさわしい言葉であるとされるが、[25] 道綱母の場合として例外ではない。「端」での「眺め」が、時に異界や他界へ通じるものであることは前節に記した通りであるが、道綱母の中には、そうした異感覚に惹かれつつも、押さえきれずに頭をもたげてくる兼家への執着、京の日常生活への未練があった。右に挙げた「眺め」のうち、③④⑤⑦の四例までもが、京との間を往来する人や文によって触発されたものであることが、何よりの証左であろう。

二十日に余る鳴滝籠りによっても、遂に作者の聖化は遂げられなかった、というよりも、聖と俗、非日常と日常の狭間にあって、意識下に制動するものが、聖なるものの呼声に耳を傾けさせなかったのである。逆にそのことが道綱母の意識を自己の内へ、過去の人生史の内観へと向けさせた。道綱母の主体的な自己認識は、聖なる世界への跳躍ではなく、やはりあくまでも兼家への未練を含めた、自己の現在の生に執することによってしか、得られなかったのである。そうした意味で、鳴滝籠り以後に開かれる『蜻蛉日記』の新しい世界は、籠りによる現実への再生だとすることもできるであろう。

注

(1) 引用は日本古典文学全集による。
(2) 上村悦子『蜻蛉日記の研究』(昭和47、明治書院) 第一部第二章 蜻蛉日記成立論。
(3) 拙稿「水辺の鎮魂—蜻蛉日記の唐崎祓—」『国文学攷』第一四五号、平成7・3。『古代伝承と王朝文学』所収。
(4) 拙稿「死と再生の谷—王朝女流の石山詣—」『日本文学』第42巻第4号、平成5・4。『古代伝承と王朝文学』所収。
(5) 吉沢義則『全訳王朝文学叢書』第十一巻(昭和2、王朝文学叢書刊行会) 四三頁。喜多義勇『蜻蛉日記講義』(昭和19改訂増補版、東京武蔵野書院) 四二七頁。他
(6) 「般若寺と道綱の母」『王朝の映像』(昭和45、東京堂出版) 所収。
(7) 日本歴史地名大系27『京都市の地名』一〇五三頁。
(8) 注6に同じ。
(9) 日本古典文学全集『土佐日記 蜻蛉日記』二五九頁。
(10) 森本茂『校注歌枕大観 山城篇』(昭和54、大学堂書店) 四五三頁。
(11) 引用は新日本古典文学大系による。
(12) 『三代実録』貞観二年九月十五日条 他。
(13) 平成九年六月十四日付朝日新聞朝刊一三版。
(14) 注6に同じ。

(15) 岡一男『道綱母』(昭和18、青梧堂) 一七六頁および一八二頁。
(16) 三田村雅子「平安女流日記文学の自然―疎外された自然・蜻蛉日記の「水」と「火」―」女流日記文学講座第一巻『女流日記文学とは何か』(平成3、勉誠社) 所収。
(17) 「『かげろふ日記』の自然描写と物詣で―視覚・聴覚の視点から―」『中古文学』第46号、平成2・12。
(18) 秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解五十九」『解釈と鑑賞』第32巻第4号、昭和42・4。日本古典文学全集・新潮日本古典集成・新日本古典文学大系も同様の解をとる。
(19) 三田村雅子「蜻蛉日記の物詣」『一冊の講座　蜻蛉日記』(昭和56、有精堂) 所収。
(20) 注4に同じ。
(21) 「蜻蛉日記注解五十七」『解釈と鑑賞』第32巻第2号、昭和42・2。
(22) (23) 『日本古代地理研究』(昭和60、大明堂) 第四章 平安京外縁部の計画。
(24) 注7の書　一〇四一～一〇五三頁。
(25) (26) 注7の書　一〇四二頁。
(27) 石坂妙子「王朝の『端』―その空間性―」『文芸研究』第一二三集、平成2・1。のち『平安期日記文芸の研究』所収。
(28) 「他界の影―光源氏のことなど―」『文学・語学』第一五八号、平成10・3。
(29) 日記上巻 康保元年秋条。
(30) 日記中巻 天禄元年七月条。
(31) 二六八頁頭注。
(32) 注4に同じ。
(33) 注18「蜻蛉日記注解五十九」。
(34) 注17に同じ。
(35) 清水文雄「物語の女―『待つ恋』と『眺め』―」日本古典鑑賞講座第六巻『王朝日記』(昭和32、角川書店) 所収。

――はらだ・あつこ、大阪成蹊女子短期大学教授――